
天使の報告書

吉村巡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使の報告書

【NNコード】

N5432E

【作者名】

吉村巡

【あらすじ】

「天使は何のために仕事なんてしないといけないの?」「分からない理由を求める他人嫌いな天使と、「仕事するとね、ヒトを幸せにすると、私も幸せになれるの」ヒトの気持ちを真剣に考える、天使に嫌われる天使の凸凹コンビの繰り広げるドタバタお仕事コメディ

プロローグ

黒い世界から、黒が消えた。無かつた白と光が急に生まれた。
目の前に白い大きな羽を生やした中性的な顔立ちの美しいヒトで
無いヒトが立っていた。

私を見下ろし、髪を覗て目を伏せ、

「君はこれから神とヒトのために頑張ることが定めとなる。君に名
を与える。君の名は、リオル。次天使リオルだ」
高圧的な態度でそう言つてくる、むしろエラソードだ。

「アナタ、ダアレ？」

忘れていた言葉が自然と出てくる。

そいつは少し目を見開き、哀しそうに笑いながら、

「私は君の指導者だ。君は私の指示を聞き、行動すればいい。さあ
少し眠れ……になつたばかりだからな」

そういう、軽々と私を抱き上げると、不意に地面が遠くなつた。
腕の中で段々と薄れていく意識に身を任せながら、懐かしい子守唄
が聞こえた気がした。

「ラウル！ちゃんと来てつて言つたでしょ？ロード様、待たせるな
んて……そりや不安なのは分かるけど、これが私達天使の仕事
でしょ？初めてで抵抗があつても分かる、だつて私も初めは不安だ
つたのよ？」

紫色の髪を緩く一つ括りにし、お姫様のような顔立ちに黒い目、白い服に身を包み、背中には薄紫の小さな羽を生やした女の子の天使が困ったように眉を寄せ、田の前の不貞腐れた顔の男の子に話しかける。

男の子の方は金色の短い髪を括つて長身を白い服で包み、木陰に座つて女の子に白い大きな羽が生えた背を向けている。

「人の話を聞くときは、ちゃんと人の目を見て聞く！」

そう言つてこちらを向かない男の子の顔を無理矢理自分の方へ向かせる。『ゴキッ』と鳴つた音は気にしない。

不機嫌そうに向けた顔は、青い瞳がはつきりと、怒つている。美形の顔なので、いつそう迫力満点だ。

その顔に怯むでも無く、女の子は、続ける、

「これは仕事なの！責任も持たなくちゃいけないの！…それが私達、天…」

「つるさい！…それが天使の役目だらうと何だろうと、やりたく無い物はやりたく無いんだよ！…自分から望んで天使になつた訳でも無いのに！何で仕事なんてやらないといけないの！…誰の為にやるの？」

女の子は顔を押さえていた手を離すと黙り込んだ、それは誰にも分からぬから。自分も育ての親にして指導者のロードに問い合わせた事のある質問だつた。だがロードは、

『誰の為に、何の為に仕事をしているのかは知つていて、そして、私達、天使が選ばれる理由も分かる。ただ分からぬこともある、例えばなぜ私達が生まれたか、他にも…・・・』

それ以上、ロードが言つことは無かつた。

目の前の男の子を見る怒りが収まらないながらも、急に黙り込んだ女の子の事を心配している様子だつた。

女の子は覚悟を決めたように男の子に話しかける、

「分かつた。やりたく無いならやら無くていい、ロード様に頼んで私だけ行くようにする。でもねラウル、仕事は仕事なの、やる理由が分からぬ、やりたく無い、望んだ訳でも無いのには、私もロード

ド様も他の天使も同じだよ？ そう考えたら切りないじゃない。私は仕事にやりがいを感じているわ。でもラウル、あなたに無理強いしようとは思わない。だから・・・

「分かったよ！ やれば良いんだろ・・・。やつてやるよ！ リオル、ドジだから心配だしね」

ラウルと呼ばれた天使は少し顔を赤くして、観念したようにそう言った。

リオルと呼ばれた天使はちょっと驚いて、嬉しそうに笑った。そして、

「ドジなんてひどい！ 私の方が先輩なんだからね！ もしもラウルが失敗したら私が助けてあげるから、安心してね？」

「安心なんかできないよ、リオルなんかに助けられたら堪ら無いね、それに、何先輩面してるの？ 僕より背が低いくせに」

（そう、助けられたく無い、そんなの格好悪い。僕よりもリオルが危ない目にあつたら、俺が助けるんだ）

そう思いながら、笑っているリオルを見つめていた。

急にリオルから笑みが消え、顔が青くなるそして、

「あー！」

と叫ぶと急に走り出した。

ラウルが急いで追いかけると、

「何なんだよ、急に走り出して？ て言つたか飛んだ方が早いと思つけど？」

飛べないリオルをからかってよく言つ意地悪で、言つ度じにじけるリオルも、このときは無視している。

流石へさすがくにラウルも不安になつてきて、

「本当にどうしたの？」

と聞くと、リオルはまだ青い顔で、

「怒られる！ ラウル見つけて連れて来なさいつてロード様に言われてたのに、遅れたから！ 絶つて絶つて、怒つてる！ またお仕置きされる！ 」

怒られると言つ单語を聞いてラウルの顔も青くなつた。

（ロードの奴、表面上はリオルの事怒つてゐるけど、内心は、俺の事怒つてんだろうな。ロード多分、俺の事嫌つてゐると思うしこつもりオルが责任感じてゐるけど大体俺が駄々こねて遅れてるし、ホント俺つて子供だな・・・）

自虐的にそう思つと、リオルの手を掴み羽を広げて軽々と抱き上げると、飛び上がつた。

「リオルの足じや口が暮れる」

意地悪を言つと一瞬驚いていたリオルも、

「失礼ね」

怒つて言い返して來た。

「でも・・・アリガト」

小さく呟くような声でリオルが言つたがその言葉はしつかりとラウルの耳にも届いた。

「しつかり掴まつておよ」

ラウルは照れ隠しにそう言つて、スピードを上げた。

プロローグ（後書き）

「」んにちは吉村巡です。初めて、こんな風に皆さんに読んで貰う小説を書いたのですが、皆さんに気に入つて貰えるか不安です。素人丸出しの文章で読みにくいとは思いますが、もし気に入つて下さったら幸いです。

リオルとラウルは田の前に椅子に座り机に肘をつき手を組んで笑いながら田が笑つていない天使を見つめながら謝罪の言葉を口にした。

「遅れてしまつて申し訳ありませんロード様」

リオルがそう言つと、ラウルが、

「リオルは悪くありません。僕が仕事をしたく無いと我がままをいつたんです。もしもお怒りなら、リオルは関係ありません。僕の所為ですから僕だけを怒つてください」

と自分が責任をかぶるよう言つた。

その言葉を聞いてリオルが口を開こうとするが、その口をラウルが手で押さえる。

田の前のロードは笑いながら、

「ラウルの言い分は分かりました。ですが無駄話をして遅れたのは事実ですよね？私は見つけて連れて来なさいと言いました。ですが、リオル、貴方は頼んでいない説得をしたんです。時間は無いんですね、説得なんてしている暇はなかつたんですねよ？無理矢理にでも連れて来てくれれば良かつたのです。後は私が何とかしたんですから。つまり、ラウルの言つた事をリオルが気にしなかつたら良かつたのです。以上の事から、リオルの責任として私からそれなりの罰を受けてもらいます」

言い終わつた後のロードの顔はもう笑つてはいませんでした。

リオルが隣のラウルを見ると眉間にしわを寄せて恐い顔でロードを睨んでいた。

田の前のロードを見るならウルの視線に挑むようにまた笑い出した。

ロードの顔は男か女か判らない程、綺麗な顔立ちだが男らしい。

その顔にある目はどこまでも深い青。全てを見透かすようなその瞳には人を惹き付ける力がある。髪は光を浴びて輝く銀色の髪を腰まで伸ばし無造作に垂れ流している。

リオルは慌てて話題を変えるよつと話を持ち出した。

「あのつ、ロード様！罰は甘んじて受けます。ですがそれは仕事の後の話ですね？仕事の内容は何でしょうか？時間も無いですし、説明してください」

ラウルが視線をリオルに持つて来て、

「あのなりオルお前は悪く無いって言つてるんだ。なのにあの頑固者がお前に責任を・・・グホツ」

さっきまで椅子に座っていたロードがもの凄いスピードで移動してラウルの襟を持ち上げて首を絞めていた。

「私が頑固者で悪かったな。確かにリオルは悪く無い、悪いのはお前だ。ただ責任を取るのがリオルなだけだ」

そう言つとラウルの襟を離した。

「ゴホツ、ゴホツ、ゲホツ」

リオルが咳き込んだラウルの背中をさすつていると、「指導者に向かつて歯向かうとは何だ？自分の力を考えて相手に物を言え。私はやれる所までで止めていた」

そう言つて訳すと、

“私は昔、指導者に歯向かいはしたが、問題になる前に終わらせた”と言つような言葉にもとれる自分の能力に自信がないと言えない言葉を口にする。

それを聞きながらラウルは、

（自分も反抗してんじゃねーか！）

と思っていた。そして自分の背中をさするリオルを見て、（あ～何か、カッコ悪いなあ俺）と思つて少し不貞腐れていた。

それに田ぞとく気がついたロードが、

「さて、不貞腐れたラウル、茶番はここまでにしてお仕事の話をし

ようか？」

それを聞いてラウルはまたロードを睨みつけたが今度は何も言わないで、立ち上がった。その様子を見てリオルも立ち上がった。

目の前のロードは先程までの笑顔は無く、いかにも上司という顔で仕事の内容を指示し始めた。

「今回の仕事は、67歳の一人暮らしの相田 光代 あいだ みつや みつよ」と、不仲で疎遠なつている、一人息子の相田 光也 あいだ みつや 原因は亡くなつた父親と息子の将来の事が元でよく衝突していたみたいだな、その息子が当時付合つていた彼女と駆け落ちしたのが決定打で連絡が途絶えた。つまり簡単に言うと、この親子を仲直りさせる。それが今回の仕事だ、さて不貞腐れていたラウル君。今回君が初仕事という事で、この手の件の中でも割と簡単な仕事だよ？失敗してリオルに助けられないよう頑張つてね～」

話を蒸し返し、茶化すように言われたラウルはキレる一步手前のギリギリの所で踏ん張りもの凄い精神力と理性で耐えていた。

（ア、彼奴マジで俺の事嫌いだな）

と、ラウル。

（よしつ！ラウルが失敗したらちゃんとフォローしないとね！）

と、リオル。

（どうなるかな・・・）

と、ロード。

思い思いの3人は色々な意味で明日の事を考えていた。

第1話・お仕事の内容（後書き）

私はパソコンが苦手です。変な設定になっていても、文章が変でも、
御勘弁ください。

第2話・お仕事前の打ち合わせ

仕事の内容を教えと後、ロードは“やる事があるから”とせつと部屋を出て行つてしまつた。

ラウルとリオルはロードが出て行つたのを確認すると、顔を見合させて別々の意味でため息をついた。

リオルは、

（ラウルもロード様も、何かお互い機嫌悪いよね～？喧嘩でもしてるのかな？でも喧嘩する程仲が良いって言われてるし大丈夫だと思うけど）

と、当人たちが聞いたら、もつと不機嫌になりそつた事を考えていた。

ラウルの方は、

（ロードの奴、リオルの前で無神経な事言いやがつて、アイツ絶つ対！性格悪い。誰がミスるかっ！アイツが指導官なんて最悪だ！）

と思つていると、

「じゃ仕事の打ち合わせしよつか？色々教えてあげないとけ無い事もあるし。明日には出発で時間も無いし」

とリオルが言つて來たので、食堂に行く事になつた。

天界の今居る建物では、羽の力が制限されていて空を飛ぶ事は高い位の天使ロードのよのなしか自由に力を使え無いので見習い天使は大きな建物の中で歩いて移動するしか無い。

食堂では他の天使たちがジロジロとリオルとラウルの事を盗み見ている。特にリオルの髪と羽を見た後の天使は近くの者とひそひそと話している。

リオルの髪や羽などは、天使中には居ない色で、指導者が実力があつても遠慮がないロードで他の指導者の天使からもリオルとラウルの評判は良く無い。そしてリオルは異端者扱いで陰でこそこそ言って無視をしてくる天使も多い。

リオルは、そんな事を気にしていないが（と言つたが気付いてい無い）ラウルは物凄く気にしている。

ラウルが周りの天使を睨みつけていると、

「ラウル！どこ向いてるの！？仕事の話なんだから、ちゃんと真剣に聞くの！」

トリオルに怒られてリオルの方を向いた。

「よしつ！人の説明を聞くときや、話を聞くときはちゃんと目を見て真剣に聞くんだよ？仕事では人の話をちゃんと聞く事が重要なことを漏らさない基本なんだからねつ！」

トリオルが言うとラウルは、

「はいはい、分りました。じゃあ打ち合わせをして下さい」と言つて、 “早く終わらせたい” と言つたののように先をつながした。

リオルが呆れた様に溜め息を一つ吐くと、すぐに真顔になり真剣に説明をし始めた。

「仕事の内容はロード様の言つた通りだから省略。私がする説明は仕事の決まりとどういった行動をするのか教えるだけ、もしも説明しないといけ無い事が増えたらその時に言うから」

そこで少し言葉を切つてから理解したかを確認するかの様にラウルの顔を覗き込んだ。

ラウルはリオルの顔を見て少し顔が赤くなるのが自分でも解つた。慌てて目をそらすと、心の中で、（いきなり人の目視んなよなつ！でも、やっぱりコイツ責任ある事をするときは、いつも真剣なんだよな）と思つてから、

「で、その決まりと行動つて？」

とラウルが言うと、

「えつと、決まりは主に五つあって、1つ・人間に正体を明かしてはなら無い、知られた場合は記憶修正をする事。

2つ・天使の能力をむやみに使つたり、悪用してはなら無い、これ

は人間にばれ易くなるから。3つ・悪魔、区域外の天使悪魔を見つけたらどの場合、例えば区域外の天使とか許可があつても指導天使に報告する事、この説明は後でするね。

4つ・悪魔を見つけても悪魔のターゲットに干渉しない、でも自分たちの担当の人間の場合は終わつていなかつたら別。

5つ・仕事はしつかり記録し仕事終了後、指導天使に報告書を提出する。仕事はポイント制で報告書を提出しなかつたり、仕事に失敗、報告書の改ざんを行つたりした場合、減点の対象で出世の道が遠のくつてロード様言つてたよ」

最後の言葉は少し気になつたラウルだが大体決まりは分つた。（出世の道が遠のくつて関係無いような気がする・・・）

ラウルがこんな事を思つてゐる、

「それで“どういった行動をするか”は、これも大きく分けて五つあつて、1つ・人間に悟られない様、能力を極力使わず、仕事を遂行する。2つ・人間に化けて生活をし、怪しまれない様に担当の人間と仲良くなる、名前も変えてパートナー同士

家族みたいになるのが殆どみたい、場合によつては違うけど。3つ・他の仕事をしている天使、悪魔を見つけても手を出さ無い、でも御呼びが掛かつたら手伝うよ。4つ・仕事が終わつたら人間の記憶を修正するか、引っ越した事にするかして、

人間と縁を切る。5つ・これが一番重要なんだけど、どんな理由があつても仕事を投げ出さ無い、これは幸せにするべき人ではないと思つる人や、生前付き合いのあつた人で忘れた記憶を取り戻しそうになつてもやり遂げなければなら無い」

そう言つた後、リオルはもう冷めた紅茶を飲み一息ついた後、「話した内容で分らないことある？」

と聞いて来た。

ラウルは、

「行動の5つ目の記憶を取り戻しそうになつた時つて具体的のどうなるの？」

と聞いた。

リオルは紅茶を全て飲み干した後、質問に答えた。

「私は体験した事無いけど、過去に何度もそんな事があつたんだつて。記憶を取り戻して姿を消した天使や、心の病になつた者、一言も言葉を交わさず食事を摂らなくなつてそのまま死んでしまつた者も居るつて聞いてるわ。記憶を取り戻しかけた者も、その間酷い頭痛がして、心の奥底で思い出したく無いつて言う声がずっと響いていたつて、そのとき記憶を取り戻さなくても、後々ふとしたきづかで思い出した者も居て、その場合そうなる前にその仕事の記憶を指導天使が消して、で仕事はパートナーが一人でやるか助けを頼むかするんだつて」

とリオルは説明した。

「へへ、でも天使に記憶修正なんてできるの？天使には効かないって聞いたけど」

ラウルがそう言つと、リオルは、

（ラウルつて意外とこういう所に鋭いんだよね、あんまりこういう所、天使は気付か無いつてロード様も言つていたし）

そう思つて、少し笑うと、リオルが笑つているのを馬鹿にされたと思つて不貞腐れたラウルに向かつて、

「あのね、記憶を取り戻しそうになつた天使や取り戻した天使はより人間に近くなるの。ちなみに、そんな天使を人天使って言うんだつて」

まだ良く分つていらないような様子のラウルにまた笑みを向けると、「えーと、天使は元々人間だつたのは知つてるよね？だから天使でもお腹は減るし、死にもする。力はあるけど疲れる事もある。それは“もとが人間だつたから”と言われているの。だけど天使は人間じゃないから記憶修正なんて本当に力のある天使・・・例えばロード様みたいな位の高い天使にしか無理なの、だから普通の指導天使には無理なんだけど、人天使は人間に近いから普通の天使にも何とかできるの。主にそんな違いかなあ？」

納得した様なラウルはまた質問をした。

「天使の死に方つてどんな死に様？それにどうやつたら死ぬの？」

またリオルが笑い出した。

ラウルは、

（何がそんなにツボなんだよつ！俺そんなに変な質問した訳じゃないのちよど
と思つた。）

リオルの笑いが収まる、

「笑つてごめんね、別にラウルが変な質問した訳じゃないのちよど
思い出し笑い」

と謝つて、不機嫌になつてしまつたラウルをなだめた。

（ラウルつて本当に子供だな～弟みたい。でもこんなに色々文句言
つてのにちゃんと私の事気にしてくれてるんだよね。

何でだろう？でも私は先輩なんだから心配かけるのやめなきやね！
でも天使つて位が上がらないと年齢も上がらないから実際には同一
年だよね？でも天使は力の一番高い年齢で成長が止まるんだよね？
確か）

「で、天使の死に方ね。天使は・・・天使の姿なら死ぬ時は光にな
るんだつて。そして人間の格好で死ぬとちゃんと人間みたいに死ぬ
んだつて。でも天使は基本的に寿命は無いの。そこで、どうやつた
ら死ぬかだけど、人間みたいに天使特有の、病で死ぬ事が一番多い
の。その他には能力の使い過ぎ、簡単に言えば過労死、それに殺そ
うと思つたら殺せるらしいよ？ちなみに例外除いて大罪だけど、で
例外が処罰。それと人天使は食べ物を食べ無くなつて死んだ天使、
自害した天使も居るから多分そんな風にも死ねると思う」

「へ～そなんだ」

ラウルが返事を返すとリオルが思い出した様に言った。

「そうそう、決まりの3つ目、説明するね。簡単に言うと悪魔は天
使と違つて人を不幸にするのが仕事なの。で、区域外の天使は、外
国の天使つて言う意味なの。私達は日本の天使で、それは日本で死
んだ人間だからで、区域外の天使は外国で死んだ天使なの。ちなみ

に、区域外の悪魔は区域外の天使の悪魔版？みたいなものなの
“分った？”と言うかの様に顔を見つめてくるリオルにラウルは、
「わかった。で、説明は終わり？」

と言つて、リオルに見つめられて赤くなつた顔を背けた。
「うんっ！取りあえず、一息つこつか？まだこれから的事、計画し
て無いし一片に話すのも聞くの大変だしね」

と言つて、また紅茶を注文した。

（ホント紅茶好きだよな～リオル。つーか紅茶狂？そう言えばロー
ドも紅茶しか飲んでない様な気がする。もしかしてその影響かな？
とラウルが考へていると、紅茶を飲み終わつたりオルが、
「じゃ次は計画たてなきやね」

と言つとラウルは、

（やつぱりまだ続くのか・・・
と思つていた。

第2話・お仕事前の打ち合わせ（後書き）

すみません、更新が遅くなりました。不定期な更新ですがどうか最後まで御付き合い下さい。気が向いたときや時間がある時に少しずつ書いていくので、もっと早く更新できる事もあるかと思います。

第3話・打ち合わせパート2

「じゃ次は計画立てなきやね」

目の前のリオルは笑っている。

ラウルは、

（まだ話し続くんだ）

と少し、と言うか、これ以上リオルに笑われたく無いと言う思いがあつた。

「まず私達の人間名だけど・・・」

リオルはラウルの心の内にも気付かず話を続ける。

「私の人間名は、もうロード様が考えててくれたからいいんだけど、ラウルのはロード様が“面倒臭い”て言つて決めなかつたから私が決めたのよ？」

そう言つてリオルは、はにかむ様に笑つた。
だがラウルは、怒つていた。

（ロードの奴っ！面倒臭いだとつ！それでも指導天使かよ！名前考えんのも指導天使の仕事じゃねーのかよ！）

叫びそうになるのを必死に理性で押さえると、体が震えて來た。

「んで、名前は？」

心無しかラウルの声が震えていた様な気がしたリオルだったが、
氣にせず続けた。

「うん、ラウルの名前は・・・」

「良宇だ」

リオルが言う前にそう言う声が聞こえた。

今まで気付いていなかつたが、周りは異様に静かだつた。

一人が思わず声のした方を見ると、そこに圧倒的な存在感を放つ
ロードの姿があつた。

食堂に居る全ての天使達の視線を集めて二人の居る席に座ると、

「どうした？話しを続ける」

そう言つて、さも当たり前の様にそう言つた。

ラウルは、眉間にしわを寄せて、ロードを睨むと思いつ切り皮肉つぱく、

「やる事が在つたんじや無いんですか？ロード様。それとも、仕事放り投げて来たんですか？そしたら問題ですよ？」

と言つた。

ロードは余裕の笑みを返すと、

「仕事をしたく無いと駄々をこねる下つ端天使と違つて、もう仕事は一週間無いに等しい。要約すると、もう終わらせた。

そして、わざわざ教え子の様子を見に来たんだ、何か問題でも？」

と言い放つた。

ラウルはグツ、と言葉を詰まらせると黙り込んだ。

ロードはその様子を見て、興味を失つたかの様に視線を逸らすとリオルに話を促した。

リオルは慌てて続きを再開した。

「えつと、ラウルの名前が決まつたから、私の名前教えるけど、私の名前は“李流”^{リル}ロード様に考えてもらつたのよ？そして、ロード様の名前は“道斗”^{ミチ}つていうの。仕事中は必ず人間名で呼ばないといけ無いから、ちゃんと覚えててよ？」

その言葉を聞いて、ラウルは、

「何か全部、安易な名前だな。考える気あるんですか？特に自分の名前とか“ロード”だから“道斗”な訳？」

と馬鹿にした様に言った。

ロードは冷たい目でラウルを睨みつけると無感情に、

「私は必ず、意味のある様に名前を付ける。お前の名前は知らないが・・・」

そこで、言葉を少し切り、リオルに目を向けると、

「少なくとも、私とリオルの名前には意味がある」

と言い切つた。

一瞬ロードの目に、優しさと悲しみが浮かんだ気がしたリオルだ

つたが、言い終わった後のロードの顔には、もつやの感情は無かつた。

「ねえラウル。人の名前にケチつけるのって酷いと思うよ？ラウルの名前も私の名前も全部ちゃんとロード様が考えてくれたんだよ？文句言うの酷いと思う・・・」

リオルにもそう言われてラウルは黙り込んだ。

「でも、黙り込んでないでちゃんと“ごめんなさい”って言つんなら、ロード様も許してくれるよ？」

リオルが笑いながら、でも、ハツキリと言つと、ラウルはロードに向かつて、

「失礼なことを言つてすみませんでした。以後このよつた態度を取らない様、気をつけていきたいと思います」と無感情に棒読みに言つた。

リオルは、

(しそうがないな～素直じゃないんだから
と思いながら、

「ロード様、ラウルもこいつ言つていますし、私からも謝りますから許してあげては頂けませんか？それに、もしもまだお怒りなのなら私のペナルティを増やしてもかまいませんから、お願ひします」

リオルがそう言つと、ロードは溜め息をつき呆れた様に、

「まあ、いいさ。どんな名前にも意味はある。その事だけを忘れなければ。それに・・・」

そこでロードが意地悪く笑うと、

「ラウル！お前の名前は適当に決めただけだからな、人間名もお前の為にそんな時間を割くはず無いだろ？」

と言つた。

リオルはその言葉を聞いた後、ラウルの方を見て体が震えているのがわかつた。

慌てて、

「ラウルっ、打ち合わせはこれで終わりだから！後は明日の為に体

休めておいでね？」

と話題を逸らすと、ロードには、

「ロード様もお仕事お疲れ様でした。疲れを後に残すと大変ですか
ら、明日にお休み下さい。私達は大丈夫ですので」

と言つて話しを終わらせた。

険悪なムードの二人を（と言つても、片方は笑んでいる）無理矢
理食堂から連れ出すと、部屋に帰らせた。

（こんなんで、ちゃんと仕事できるのかな）？ロード様は大丈夫な
んだけど、ラウルは不安だな。まだ経験も少ないし・・・、ロー
ド様には何か頼れるけど、ラウルには何か甘えられ無い。何でだろ
う？まあ力の差かな、ラウルが失敗したら私がフォローしないとね
！）

リオルが再度、決意をすると明日の為にベットに入った。
リオルが深い眠りにつくのに、長い時間はかからなかつた。

リオルが眠りについた頃、ラウルとロードは共に居た。

「明日の事もあるので早く眠りたいのですが？」

ラウルが嫌みたつぶりにそう言つと、ロードは冷たく、

「直ぐ終わる話しだ。それとも終わるまで起きていられない程子供
なのか？」

と言つた。

「手短にお願いします」

ラウルはうんざりした様にイライラと言つた。

ロードは冷たく笑うと素の口調で、

「忠告だ。いくら“初めて”と言つてもあの子に多大な迷惑はかけ
るなよ？お前が失敗してリオルに迷惑をかけると、あの子の立場は
もつと無くなつて来る。まあ、あの子自身は気にしていないがな」
と言つと、ラウルはまるで“何も知らない訳じやない”とでも言
う様に、碎けた言葉で、

「そんな事俺でも分つてゐるわ、つーか、知ら無いのリオルぐらいじやないのか？それに俺はそこまで弱く無いし、いざとなつたら俺がリオルを守る」

ときつぱり言った。

ロードは、口元をあげて小さく笑うと、

「お前に何ができるんだ？どうせ初仕事はリオルに助けられるや。それに“守る”だと？今、何の力も無いお前にできる事などたかが知れている。リオルを“守る”事ができるのはお前では無く私だ。勘違いするな」

そう言つと、ラウルが文句を言おうとするが、いつの間にかロードの姿は、どこにも無かつた。

「やっぱり、ロードの奴リオルに甘いな、でー絶つ対俺の事嫌いだー！」

そう言つたラウルの声は、誰にも聞かれて居無かつた。

窓の外を見ると空には星が輝いていた。

そろそろ真夜中になる。

ラウルは明日の事を思いながら、眠りについた。

第3話・打ち合わせパート2（後書き）

吉村です。私の小説を読んで下さりありがとうございました。誤字・脱字等もあるかと思いますが、ご了承下さい。感想など、送って頂けると嬉しいです。

第4話・扉の中で

「ここが地上に通じる扉よ」

リオルがそう言って大きな扉を指差している。

「早く、そつちに触つて」

いつの間にカリオルは扉の片側に触れていた。

ラウルが慌てて、もう片方を触れると、

「目を閉じて“人間界への扉を”って心の中で強く念じて。そしたら開くから」

（何か、天使ならいつでも行き来できそうだな）

軽くそんな事を思いながら、ラウルは目を閉じて念じた。

周りが一瞬光に包まれて感覚になつたが、急に暗くなつた気もした。

「もう目、開けていいよ？」

リオルにそう言われ、ゆっくりと目を開くと、閉じていたはずの

扉は開いていた。

扉は、そこに扉だけがある様な、不思議な扉だった。

そしてその扉に続く道と部屋には、誰一人として天使は居なかつた。

扉の大きさは、普通の家を三つ重ねた様な大きさだった。

開いた扉の先は、真っ暗闇だった。

「すごいな、アレだけ大きな扉があんな簡単に開くんだ・・・」

ラウルがそう呟くと、

「驚いたでしょ？実は私も最初ビックリしたんだ。ロード様が言うには天使って基本的に人間界には自由に行き来できるんだけど、規則としてはあまり行っちゃいけ無いんだって。行くとしても、指導天使の許可が居るし、場合としては、同行する天使もいるんだって。

でも、勝手に人間界に言つた天使もいるよ？もちろん無断で「トリオルも答えた。

（何か、無断で人間界行つた天使がロードな気がする・・・）
リオルの言葉を聞いて、ラウルがそう思つていると、
「じゃ、そろそろ行きますか？」

リオルがそう言つて、ラウルに呼び掛けて来る。

「どうやつて行くの？人間界には」

ラウルがそう言つと、リオルはさも当たり前の様に、
「そんな“どうやつて？”って普通に扉をくぐるんだよ？進んでい
けば人間界に着くから」

（何だよそれ。そんなんでいいの？なんかアバウトだな～）

ラウルはそう思いはしたが、リオルが扉をくぐるつと見るのを見
て、その後に続いた。

暗闇に足を踏み入れた瞬間、視界から光が消えた。

ラウルが、“リオルが見えなくなる！”と、少し慌てて周りを見
回すと、

「そんなんに慌てないで？大丈夫だから！落ち着いて」
声がした方を見ると、リオルがぼんやりと闇に浮いていた。
自分の状態も手を目の前にかざすとぼんやりと、でも次第にはつ
きりと見えてきた。

ラウルが慌てた事を、恥ずかしく思い眉間にしわを寄せると、リ
オルがすまなさそうに、
「ごめんね、ラウル！早めに言つておけば良かつたよね？怖かつた
よね？」

と、今にも泣き出しそうに言つた。

そんなりオルを見て、また慌てたラウルは、
「別に怖く無いよ。それより、どうして暗闇の中で姿が見えるの？
と話題を変えた。

リオルの泣きそうな顔を見たく無かつたから、

（何か矛盾してるな、俺・・・。リオルにはいつも笑つていて欲し

い、でも俺に向かつて泣いて欲しい、頼つて欲しい。

ロードなんかじゃなく俺を頼つて欲しい。でも泣いて欲しくも無い。いつまでも笑わせてあげたい。それに、リオルが俺に向かつて泣きついてきて、俺に何ができるんだろう？…………答えは、何も。何もできない、何もしない、何かしたいのに…………でも、ロードには何かができるんだろうな、リオルの為に……）

（はくせん）漠然とそんな事を考えるラウルに、リオルは、

「本当にごめんね？……あのつ、実は私も初めてのとき、怖くてパニックに陥つて、ロード様に迷惑かけちゃつて……」

私がちゃんと言つていれば良かつたね……」

まだ気にしているリオルに向かつて、ラウルは、
「その話、もういいからさ、先進まない？進みながら、せつしきした質問に答えてよ」

と言つと、立ち止まつたリオルの手を取り、先へ進んだ。

ラウルの顔は、リオルには見えない様にしていたが、真つ赤だつた。

「ちょ、ラウル、手、離して？ちゃんと歩けるから」

リオルにそう言われて、ラウルは慌てて、

「あっ、ごめん」

と言つと、手を離した。

リオルは笑いながら、

「いいよ、歩いてなかつた私がいけないんだもん」

そう言つとリオルはラウルの隣を歩き出した。

その様子を見てラウルは歩く速度をリオルに合わせた。

隣のリオルを見ながら、

（そう言えば、慣れた奴なら平氣だけどリオルつて基本的、俺とロードくらいしか触れられるの馴れて無い様な気がする。

俺も最初の頃リオルに思いつ切り避けられてたよなあ）

（思つていると、次にこうも思つた。

（それにしてもロードは最初の時どうだつたんだろう？俺みたいに

拒否されたのかな？でも最初あつた頃の依存度考へるとロードがリオルに嫌われた事無い様な気もするんだよな（そんな事を考へていると急にリオルが、

「あつ！先つきラウル言つてたよね？“何で暗闇の中で自分たちが識別できるのか？”つて」

リオルがそう言つと、

「ああ、言つたけど理由分んの？」

ラウルがそう言つと、

「私もロード様に質問したんだ、その疑問。面倒くさそうに説明してくれたよ？」

リオルが笑いながらそう言つてているのを聞くと、（あ～、あの人っぽいな・・・）

とラウルは思った。

表情にも出ていたらしく、リオルが、「まあロード様らしいけど、そんな顔しないの！」

と言つてきた。

「じゃ、続き説明するね。ロード様が言つたまゝ、この暗闇の中で物質や生命体は光を纏うんだって。光は命が無くとも、死んでいても光を纏う。その光は簡単に言えば『オーラ』みたいなもので、それに固有のオーラがあつて、その中でも個人によつて色々違つてるの。で、・・・・・」

「ちょっと待つた」

リオルの説明がずれて來た。

（これじゃ、その“オーラ”的説明になつてゐる気がする）

「何でこの暗闇の中で光を纏うの？」

ラウルがそう修正すると、

「だから、オーラが光るか・・・・・」

リオルがそう言つのを遮つて、

「そうじや無くて、何でオーラがこの暗闇の中で光るのかを聞いてんだけど」

と、ラウルが言い直すと、リオルは納得した様に、
「あつ！ そう、言つ事か」

と言つと、説明を続けた。

“何でこの中だけで光るのか？”は、ロード様にも、過去の偉大な大天使様にも分から無かつたんだつて。…………でも、ロード様が言つには、多分この扉は“自分の本当の姿を映すものだらう”つて。例えば、先つき説明でき無かつたけど、

この中で全く同じに光る人はいない。それぞれ必ず違つてゐるの。

・・・・・ ラウル手出してつ

急にそう言われ、手を出すと、リオルもラウルの手と見比べられるように手を出して並べた。

「ね、違うでしょ？」

一目見て分つた。

意外な事に、リオルよりもラウルの方が光つてゐた。

「何で・・・・・・」

「私よりも、力が強いから。・・・・・・ここでは力の有るモノ、心の綺麗なモノが眩しい程の光を纏う。ラウルの光も眩しいよ？光の鈍い私とは全然違う！ やつぱりラウルは凄いね・・・」

そう言つリオルの顔は笑つてはいたが、
(心の中では絶対落ち込んでるんだろうな・・・)
と思うと素直に喜べなかつた。

確かにリオルの光はラウルと違い、ほんやりとしたままで不安定に暗くなつたり明るくなつたりしていた。

「こんな風に消えちゃいそうに、不安定な私は能力が弱いの。ロード様にもそう言われた不安定なものは心も能力も弱いか未熟だ”つて。だから私は未熟である方に賭けた・・・だけどロード様には“お前は変われない。無駄な事はするな”と言われた、だから諦めた。・・あの時は悔しかつたけど、今はもうふつ切れた。それに、よく考えたら努力も仕無いで諦める何てロード様は言わない！だからきっと何か理由があつた。今はそう思えるの」

喜んでいないラウルを気にしてカリオルはそう言った。

気にしていないと

ふつ切れたと

“大丈夫だ”と言つてている様に聞こえた。

“氣にするな”と言つてている様にも聞こえて、ラウルもそれが本当の気持ちに聞こえ、ホツとした。

そう思つたのも束の間、ラウルは新たな疑問を感じた。

「なあ、人間界のどこに着くんだ？ 行く先々が毎回変わるの？ それとも決まつてんの？」

不意に思つた事を質問すると、

「え？ 行く場所？ それは・・・・・・」

リオルが少し不安そうに、苦笑いしながら言おうとしたと急に引つ張られる様な感覚があつた。

ラウルはいつの間にか床に尻餅をついていた。慌てて立ち上がりと周りを見回すが自分以外居なかつた。

混乱していたが、頭の中は妙に冷静だつた。

（もしかして、目的地に着いたのか？・・・でもリオルは？）

考えていると、目の前の壁だと思っていたものが通つて来た扉だと気付いた。

第4話・扉の中で（後書き）

こんにちは、吉村巡です。

この回を書いていて、ラウル君について思ったことがあります。
何だか、ラウル君が知りたがりの様な性格になつていてるみたいです。
でも、そんな知りたがり君のラウル君を好きになつて頂けたら、嬉しいです。

「扉・・・通つて来たんだよな？俺。じゃあ、リオルが居ないって事は俺より早く出たか、まだ扉の中？」

ラウルは、扉に駆け寄ると力の限り押した。だが、少しも動かない。

「くそつ！！」

そう叫ぶと、近くにあつた椅子を振り上げて扉に叩き付けようとした。

「うわ～短気なんだねえ。一応言つとくけど、それ壊しちゃつたら中に居るヒト、出られ無くなるよ？まあ、扉が直れば出られるけどねえ」

急に声をかけられて、椅子を下ろして振り返ると、ヒト一人がやつと通れる位のドアから一人の男が顔を出していた。

「お前誰だ？人間？だとしたら、何でそんな事知ってるんだ？」

警戒心と、不機嫌さが混ざった様な口調でそう言つと、

「まあまあ、落ち着こうね？確かラウル君、だよね。俺は杞塚

キツカ

アキ 春^{ハル} 昌^{カズ} には春さんとかハルとか呼ばれてるから好きに呼んでいいよ？

ちなみに天使と人間のハーフ。後、こここの教会の牧師兼責任者で扉の番人つて言えばいいかな？年は18だから君の外見年齢よりも少し上ぐらい。取りあえず、このまま待つてるのも時間が勿体無いから着替えてね？君が着替えるとこは、こっちの部屋の右の部屋。あつ、ちゃんと服置いてあるから」

そう言つと春昌は怪しげな微笑みを浮かべたまま、ラウルの手を掴み半ば強制的に部屋へ入れた。

「何なんだよアイツ・・・それに天使と人の子供？」
部屋に押し込められたラウルはそんな疑問を呟いた。

見回すと部屋は割と狭く、ラウル以外誰もいなかつた。そして、言つていた通り、服はちゃんと置いてあつた。

床へ・・・・・。

「ハアつ！？ ふざけんなつ！ 嫌がらせか！？ 普通、机あんのにわざわざ床に置くか！？」

ひとしきり、怒りを発散させると服を拾い上げ埃を払うと、着ていた服を脱いだ。

「へえ、結構いい体してますねえ～」

「なつ、何見てんだよ！ 変態かつ！？ つかつ、何でわざわざ服、床に置くんだよ嫌がらせ？」

いつの間にかドアが開いていてその向こうで春昌が笑っていた。微笑みながら近づいてくる春昌を警戒して、ラウルは急いで服を着た。

ラウルの前で立ち止まると笑顔をキープしたまま、「そんなん変態なんて言い掛かりやめて下さいよ～、僕は見たくて見たんじゃないんですよ？・・・君の事は嫌いだし。嫌がらせと言うよりも君に親切にするのが嫌なんですよ」

途中からは声のトーンは下がり、口調も冷たいものになつた。笑顔も消え目は相手を探る様な目つきになつていた。

「取りあえず俺は、あまり仕事に私情を挟むつもりは無いけど、君とだけは仲良くなりたく無いから他の人達より待遇悪くても我慢してね？ 後、親切にして貰おう何て思わないでね。する気無いから」

そう言い終わると、春昌はラウルを睨んで來た。

ラウルの方は、

「何で俺の事、嫌いな訳？ お前と会つた事無いよな？ まあ、お前に嫌われても別にいいけど。そんな事より俺の事知つてるつて事はリオルの事も知つてんだよな？ アイツ今どこに居るんだ、教える！」

と、やや苛つきながらも言い争うよりもリオルの事を優先させた。

「付いて来い、まだ時間がかかる。リオルの力はそんな強く無いからな」

春昌は着替え終わったラウルを今までとはまた違う部屋へ案内した。
もつ、敵に対する様な言葉遣しか仕無いらしい。

案内された部屋は今までのどの部屋よりも大きかった。

「どうぞ、座つていいよ」

そう言われて座ると、二つあるドアの内、通つて来たドアとは違うドアから人が入つて来た。

「扉の中は初体験だつたそうですね？お疲れ様です。お茶を入れたのでどうぞお飲み下さい。あつ、紹介が遅れました。私は木塚高昌キヅカタカアキとります、春昌の父です」

明らかに人間の男だった。髪を短く切り、眼鏡をかけた目の奥は優しそうに微笑んでいた。

「父さん、これから話しあるから出て行つて、もう番人は僕だから。あつ、そうそうリオルが来たら連れて来て多分、後10分は掛かるだろうけど・・・・。その間、君に説明する事がある」

春昌が淡々と言うと、春昌の父親は部屋を出て行つた。

ラウルは出て行く春昌の父親を見た後、春昌を見据え観察した。

春昌は父親に似た目が優しさを印象づけているが、今の表情からは冷ややかな印象しか無い。

「まず始めに、

初仕事が成功する様、健闘を願う。君が失敗したらロード殿とリオルが築いて来たノーミスの記録更新を破る事になるからね？」と言つても、ほとんどはロード殿の力だと思つけど。次に、この教会は日本各地に散らばる天使たちの連絡所であり中継地点だ。ここは天使が送られてくる場所であり、天界へ帰る場所である。つまり、ここから仕事に行つてもらつ。ここまでで何か質問は？」

春昌が事務的に棒読みにそう言つと、

「じゃあ、何で中継地点なんて出来たんだ？わざわざ面倒くさいし、

手間も金も掛かる様な事してまで
当然の様な質問をすると春昌は、

「ちつ」

と舌打ちした。

（うわつ俺に対してだけ？それとも皆こんな感じなのかこの態度）
ラウルがそう思つていると、

「考えて分かんないの？そんな当たり前の事。自分で考えるつて事
しないのは、良く無いよ。自分で答え考えなよ説明すんのも面倒く
さい」

と言つて結局教えはしなかつた。

ラウルは、答えを諦めて次の質問に移つた。

「じゃあ、何で君みたいな人間が天使の存在を知り、教会の番人な
んかになれるんだ？」

春昌は深く溜め息をつき説明した。

「天使は子供を産めるんだよ。天使同士でも人間とでも、ただ人間
との例はそんなにある訳じや無い。俺の場合、母は天使で父が人間
だつた。だから俺はハーフなんだ、その二つに属し、属さない。中
途半端な存在なんだ、俺の場合は中途半端に力もあるしね。つまり、
人間以上・天使以下だから人間が来た時も対処できるし、悪魔が來
た時も何とかなるしね」

春昌が淡々と言つていると、部屋の外から足音が聞こえた。

ドアが開くと人か着る服を着て、微かにほつとした様なリオルが
高昌と供に入つて來た。

すると春昌の顔が急に変わつた。

冷たい顔は一瞬にして消え、高昌と同じ様な笑みを浮かべ優しい
顔になつた。

「久しぶり、リオル。いつもより遅かったね？それにしても相变ら
ず可愛いね~」

嫌みにも、お世辞にも聞こえず。本気でそう思つてる様な口調に
ラウルは、

(ライバルだ！木塚春昌、お前の言つ通り、俺とお前はライバルだ！)

そんな二人の気持ちにも気付かずリオルは春昌に向かって、

「ありがとう、お世辞つて分てても嬉しいよ。ラウル、もう春ちゃんと話したんだよね？春ちゃんも高畠さんも優しくて親切だからって、我が仮言つちや駄目だからね？」

リオルが姉のようにそう言つが、春昌は、

「リオル、ラウル君は“我が仮”何て言つて無いよ？と言うが、ロード殿や他の天使みたいに注文言つて来たりしないよ。リオルと一緒に緒でね」

ラウルと話す口調とは違つて、優しい言い方の言葉は更にラウルのライバル意識を高めた。

「取りあえず、リオルも座りなよ？扉の中で疲れてるだろ？し、冷めない内にお茶も飲んで？父さんには、悪いけど……

・・・

春昌が父親への態度も改めてそつと高畠は、

「ああ、じゃあもう出るね？」

と言つと、部屋を出て行つた。

高畠は無人の廊下で苦笑しながら考えていた、

(我が息子ながら、難しい性格だ。どう育ていたらあんな性格になつたのか……。ねえ、ハルカもそう思わないかい？)

高畠が部屋を出て行つてリオルが椅子に座り、お茶を飲み、一息

つくと春昌が、

「じゃあ、そろそろ仕事の詳しい説明をしようか？」
と、笑いながら言つた。

第5話・教会と番人（後書き）

吉村です。新しいキャラクターの春昌君。二重人格の彼ですが、リオルへの気持ちだけは本物です。こんな裏表の激しい彼ですが、実は内心は複雑な思いもあります。これから絡みも頑張って書きたいと思います。

第6話・詳しい説明

「今回の仕事は、ロード殿から大雑把に聞いてると思つけど。相田光代と相田光也の関係修復だ」

春昌は初めにそう言って説明を始めた。

「確かに親の決めた将来に反発して恋人と駆け落ちしたんだよね？」

リオルが春昌に対してもう言つと、

「ああ、割と凄い親子喧嘩で、近所でも評判だつたらしい。駆け落ちした後は完全に音信不通で両親の方も、光也に勘当を言い渡してた。その十年後父親が病死しその時に帰つたらしいけど、母親の方も意地はつて“一緒に暮らそう”って言つた息子に“お前と住むくらいなら一人で暮らす方がましだ”と言つて送金されるお金も送り返してる骨のある人だ」

でも、少し苦笑気味に言つていた春昌は急に真顔になり、「だけど、このままだと光代さんは・・・たつた一人きりで死んでいく可能性がある。心残りを、光也さんと和解する事無くそうなれば確率は低いけど靈体になるかもしれない。そこで！一人に、この親子を仲直りさせて仕事終了です。仕事の説明はここまでだけど、今回はラウル君の初仕事と言う事でいつもより難易度低いんだ。そんなに緊張しなくていいからね？後、ラウル君には他の説明もあるから、リオルは他の手續済ませておいてくれないかな？」

春昌がそう言つとリオルは、

「うん、お易い御用です。ちなみに今回どこでの仕事なの？」
と言つた。

(“どこでの仕事”ってどういう意味？)

とラウルが考えていると、春昌は

「今の季節では厳しいかも知れないけど、エリアーだよ」と答えた。

リオルは微妙な顔をして、

「今、冬だよね？」

と泣きそうに言った。

春畠は、同情する様に苦笑すると、

「一番簡単なのがここだつたんだ……『ごめんね？』ロード殿にも少し文句言われたんだけど、ラウル君が初仕事だから、それにロード殿から色々条件付けられてるから、いつもより快適だと思つよ？本当に『ごめんね』」

そう言つ春畠に慌てて、

「ううん！いいの。仕事だもの、文句は言えないわ。それにいつもは、裏で色々、贔屓して貰つてるもの……今回の仕事もそうでしょう？本当にロード様は強引何だから」

トリオルが言った。

（いやいや、そこに居る男の下心もあると思つぞ）

心の中でラウルが突つ込みを入れていると、トリオルは手続きの為に部屋を出て行つた。

「さて、面倒だけど説明してやるよ。ちなみに、話してゐる時は私語厳禁。」

そう言い放つと春畠は説明を始めた。

「規則は、おおまかにロードさんから聞いてると思うんで省略。ああ、これは注意だけど悪魔が天使の方にちよつつかいかけてくる時がある、無視するかブツ飛ばせ。それとトリオルをあまり一人にするな、よくトラブルに巻き込まれる。仕事に支障は無い程度な事の方が多いがな」

急に鋭い目になり本当に真剣な口調で、

「リオルに悪魔が近づいて来たら気を付ける。少しでも気配を感じたら警戒しろ。悪魔と人間は天使と同じ様に子供を作れる。そして、天使と悪魔も同様に、だ」

ラウルはその言葉を聞いて、少し嫌な予感がした。

（リオルには力が無い、そして悪魔に狙われやすかつたりして・・・）

ちなみにラウルの第六感は普通のものより発達している。勘を外す事はほとんどない。

そんなラウルの勘の存在を知る由もなく、春昌は続けた。

「次に仕事のやり方だが、人間に化けてターゲットに近づく。そして天使の力はバレる事があるので大きな力は、極力使わない様に、話術や地道な情報収集それに基づいての行動、後押し、催眠術を駆使して解決をしろ。解決できなかつたら仕事失敗、それはターゲットの死もしくは、期限内に解決できなかつたらです。基本的には一ヶ月、S級以上は仕事によるが何年か掛かる時もある。まあ、駆け出しのひよっこには絶対に回つてこないから。回す気もないしね、リオルがいるし。まあロードさんなら違うけど・・・取り敢えず、日本ではそういうS級は無いし」

それを聞いて、何か少し悔しい思いがラウルの心に広がった。顔にも出ていたらしく、春昌は面白そうに眺めていた。

（コイツ、確実にSだ！）

とラウルは思った。

ラウルが真顔に戻ると、つまらなそうに春昌は続けた。

「これは、仕事中は必ずやる事だが、ターゲットの監視を怠るな。情報収集も仕事が終わるまでやり続ける。終わるまで気を抜くな、終わつてもここへ帰るまで警戒を怠るな。そして毎日の仕事の情報、ターゲットの変化、取り巻く環境の変化、自分たちの行動、自分たち、ターゲットに遭つた出来事を記録し、報告書を作成しろ。それは自分たちの担当の天使に持つていく。提出したら、仕事は完全に終了だ。必要最低限の事は以上だ。何か質問は？」

言つべき事を簡潔に言い切つた春昌は面倒くさうに言つた。

「じゃあ1つだけ。さつき言つてたエリア1つてどういう意味？」

「ああ、エリア1は、北海道っていう意味&#9829・」

爽やかな笑顔で春昌が答えた。

「ちなみに、今の日本の季節は冬です。君にはいい気味だけど、何で君の為にリオルまで巻き込まれないといけないのかな？」

さり気なく毒づきながらそう言つと、春昌は、

「絶対失敗すんなよ？失敗なんてしたら・・・・・取り敢えず、

ロードさんに“ラウルはリオルと組ませるべきじや無い”

つて進言してあげる」

と低い声で脅す様に言つた。

第6話・詳しい説明（後書き）

更新が遅くなつてすみません。取り敢えず地道に書き上げていま
すので、長い田で見て下さい。

第7話・仕事開始！

雪、雪、雪。見渡す限り雪。

しかも、着いた早々吹雪。

極寒の地、北の国“北海道”ちなみに真冬。

「さつ、寒い・・・」

「大丈夫か？李流」

「うん。でも、良宇は何でそんな顔していられるのが分らない」
李流ことリオルは寒さに震えない良宇ことラウルに向かっていつた。

冷たい風や雪は容赦なく一人を襲う。

良宇は震えている李流に自分のはめていた手袋を渡した。

「良宇いいの？寒いのに・・・」

複雑そうな顔で聞いて来る李流に、

「俺は別に大丈夫だから。寒いの苦じやないし」とサラッと良宇は返した。

「ありがとう」

李流はそう言つと手袋をはめた。

「あれが、ダーゲットの家か？」

「うん、そうだよ」

良宇が指差している方を向きながら李流は答えた。

「そして、ここが春ちゃん達が手配してくれた家」

李流が指差すのは、ターゲットの家から50mと離れていない普通の家だった。

取り敢えず中に入ると、家の中は暖かかった。そして、それは吹雪の中を歩いて来た一人にとっては、有り難かった。

「温かい」

嬉しそうに言つ李流に取り敢えず熱い飲み物でも、と思い良宇はキッテンに行き、色々と物色すると、ココアや茶葉、コーヒーの豆などがでて来たり、冷蔵庫の中からは牛乳、カルピス、野菜ジュース、その他料理の材料、野菜庫には野菜がたっぷり、冷凍庫にはアイスクリーム、氷、冷凍食品もでて來た。

戸棚を開けると料理器具がずらり。その隣の戸棚は調味料、香料、酒類がずらり。

何を作るかわざわざ悩んだ後ホットミルクココアにした。

「李流」

そう言つと、振り向いた李流にココアを渡した。

「熱いから気をつけて」

「ありがとう、良宇」

そうして、一息つくと、

「じゃあ、今回の作戦の内容を伝えます」

と、李流が切り出した。

作戦の内容は、「近所さんとして仲良くなり、それとなく和解の後押しをする。

と言つものだった。

「でも、仲良くなれるの？」

良宇が指摘すると、

「大丈夫、家族仲は悪いけど、」近所付き合いは良いらしいし、なによりやつぱり寂しいと思うんだ・・・そこに入つてみれば案外簡単なんだよ」と返した。

「こんにちわ。近所に越して來た追川と申します。引っ越しの「」挨拶に参りました」

李流が笑顔でそう言つと、玄関から一人の60歳くらいの女性がでて來た。

「あらあら、」丁寧に。私は相田光代と申します。このじでの暮らしは長いですから困つた事や知りたい事があれば聞いて下さい」

穏やかな物腰で相田光代はいった。

「ありがとうございます。夫共々お世話なるかもしません。ようしくお願ひします」

「あら、旦那さんがいらっしゃるの？」

「ええ、夫の転勤でここに越して來たんです。一緒に挨拶できれば良かつたんですが、何分昨日越して來たばかりで家の片付けがまだ全然出来てないんです」

「結婚なさつてるなんて、全然見えませんわ。とてもお若いのに・・・。

「お子さんはいらっしゃるの？」

「いえ、まだ結婚1年目で」

「まあ、これからですわね」

初対面としては上々の滑り出し。

「ただいま良宇」

「お帰り。凄いな、ああやつて仲良くなるのか・・・」

「うん。今回は良い方だよ、もつと接触が大変だつた時もあるしここでふと、良宇がいつた。

「なんか髪の色と目の色が違うと別人みたい」

「でもこうしないと怪しまれるから」

李流の髪は黒く少しウエーブがかかつた髪を腰まで伸ばしたもの

を「ゴムで括り、後ろに流していた。顔は元の時よりも大人っぽく、目は夜の様に黒かった。

対して良宇は、少し茶色ががつた黒髪をスッキリとさせていて、元の時よりも背が高く目は薄茶色で、いかにも誠実で仕事のできそうな切れ者という感じだった。

二人ともそれらしく見せる為に、暖かくても動きやすい格好をしていた。

「取り敢えず、三日後には息子さん達が来るんだしされまでにもう少し仲良くなつて、懐柔しとかないと。ね？ 良宇つ！」

「一つ質問」

「どうぞ？」

「懐柔とか付け入るとか、どこで覚えたの？」

「もちろん、ロード様の教えだよ！」

（ああ、何か納得）

純真でいつまでも子供のようなリオルはロードの教えを忠実に守り、実行する。ロード仕込みなのでリオルの仕事は完璧にプロと言つて良い。

それから李流はお言葉に甘えて町内会の人たちに紹介してもらつたり、積極的に地域活動に参加していた。

勿論、相田光代に紹介してもらつたのだ。その縁、と言つて李流はどんどんターゲットと親睦を深めていった。

そして、その時が来た。

「結構です！ 貴方の世話にならうとは思つていません！」

タイミングを見計らつて外へ出た李流は驚くふりをしながらダーベットの家へ向かった。

「相田さん、どうかしたんですか？ 大丈夫ですか？」

李流が玄関に立つて光代に對峙している男を少し不穏そつな目で見てから心配そうに光代を見つめた。

「何でも無いのよ。ごめんなさいね、お騒がせしちゃって」

「いえっ！それよりも、本当に大丈夫なんですか？こちらの方は」

「ええ、私の・・・息子よ」

「あ、ごめんなさい。他人が居たら迷惑ですよね」

李流は慌ててそう言うと何度も心配そうに振り返った後、家へと戻つて行つた。

（これで、息子にも印象付けられたでしょう）

と思いながら。

第8話・接觸（後書き）

久しぶりの投稿です。ですが、もう一つの方の話に力を入れているので、こちらは恐らく更新出来ないと思います。

呼んで下さった方には申し訳ありませんが、もしかすると更新する場合があるかもしれないで長い目で見ていて下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5432e/>

天使の報告書

2010年11月11日14時46分発行